全教 枚方教育

全教・枚方教職員組合
枚方市西禁野 1-1-3
No.１９６６
2024. 12. 23.
TEL 848-3300
Fax 848-3052
組合ホームページ

組合の要求・交渉で 約11万～40万円
給与・一時金引き上げで差額支給（12/27 支給）

枚方教組、大教組が参加する府労組連の取り組みで、人事委員会が勧告した内容の賃上げが実現しました。12 月 16 日府議会で給与改定の条例が可決され、4 月にさかのぼっての給与・一時金が引き上げられため、12 月 27 日に、2024 年度分の差額が支給されます。

初任者や若年層を重点に賃上げされてはいますが、全世代の賃上げは 2 年連続となります。

従来大阪では維新府政が続き、橋下、松井、吉村知事のもとで人事委員会が引き上げを勧告しても無視したり、逆に引き下げを行うことで給与が著しく低く押さ上られてきました。

枚方教組、大教組も参加する府労組連が府当局に強く引き上げを求めて交渉を続けた結果、2 年連続で全世代の賃上げが実現することができました。

差額支給目安

25歳	約40万円
35歳	約23万円
45歳～	約11万円

地域手当（給与の 11.8%）、教職調整額（4%）は目安額に算入していません

市費会計年度職員は1月、市費常勤(任期付)講師は3月差額支給へ

市費講師について、会計年度任用職員（非常勤）は週３０時間程度勤務で、月額２万円前後の引き上げと差額支給、常勤（任期付）講師については、府費教員に準じた給与引き上げと差額支給が行われます。

ただし、会計年度任用職員の差額は１月の給与支給時に、市費任期付講師については市の条例改正が３月になる関係で、３月給与支給日に差額支給の予定です。

市費職員に関しては地域手当が現行１０％（給与の）、から 2025 年に１１％、2026 年に１２％に引き上げられます。（一方で、市当局は財政負担軽減を狙い、給与月額を 4 月から 4,400 引き下げるとしています）

物価高騰、教育・介護・老後資金、さらなる賃上げを 組合に加入して、中堅層以降も大幅賃上げを

今回実現した給与引き上げ・差額支給は、組合の強い要求と交渉が行われてきたことで実現しています。欧米では公務員・教員も含め労働組合の交渉やストライキが行われることで、日本をはるかに上回る賃上げが実現してきています。

今回の引き上げ、差額支給は家族の生計費、教育や介護さらには老後資金など、一番家計負担の思い中堅層以降にとってはまだ不十分です。

お金の心配なく、教育に向き合えるためにも、皆さんが組合に加入して、力を合わせて声を上げていくことが必要です。

組合加入申し込みフォーム
全教・枚方教組について、詳しくは組合ホームページを

全教（全日本教職員組合）の枚方教職員組合のニュースです　枚方教組に加入して学校や働き方を変えていきましょう

ほんとうに、万博学校見学に参加しますか？

12 月 13 日の枚方市議会で、議員からの万博学校参加についての質疑が行われました。参加希望校が減少している点や、バス、電車利用の場合の重大な問題点、熱中症対策など安全対策が取り上げられました。

参加希望校　小学校20⇒17、中学校10⇒9校に(小45、中19校中)減少

質疑の中で、市教委から、６月時点で小学校２０、中学校１０校の参加希望が、１２月時点で小学校１７、中学校９校に減少していることが明らかにされました。さらに交通手段については、次の点も示されました。

小学校　１７校中、１４校が招待事務局手配の貸し切りバス、
３校については低学年が事務局手配の貸し切りバスと他学年は電車で会場へ。
中学校　９校中、　４校が事務局手配の貸し切りバス。
１校が学校から森ノ宮までの貸し切りバスと子ども専用電車で会場へ。
４校については電車とシャトルバス。

交通手段、朝の大渋滞、帰りは普通列車、先生の負担は相当なもの

質疑の中で、議員から、万博会場にわたる橋は一本しかなく、一般車は通行しないものの、学校見学バスが集中するため朝の時間帯に大渋滞の恐れがある上、電車の場合も、「子ども専用列車」の予約は行きだけで、帰りは普通の電車に乗ることになり、「子ども優先車両」は午前中のみの設定で、午後からは優先車両はないとされている点を指摘。

学校見学に連れていくなら、先生の負担は相当なものになると懸念が示されました。

熱中症、安全対策どこまで　エアコンのある休憩所 300 席のみ

万博期間中の学校見学が集中する時期についての熱中症の対策について、団体休憩所５か所３８１６席中、エアコンのあるのは１か所、パビリオン建物を活用した３００席のみ。ほかは公園のあずま屋のような屋根があるだけのもの。本当に健康がまもれるのかと取り上げられました。

先生の下見、計画準備に間に合うのか、新学期初めに先生が対応できるのか？

学校参加に必要な事前下見について。現時点で下見ができるのは、開幕（4/13）後の平日のみ。

開幕前の 1 週間のテストランの時期に下見を可能にするよう検討されているが、5 月ごろ見学の学校の場合、しおり作成・配布ためには 4 月の早い時期に下見が必要。年度初めのクラスづくりが始まったばかりの時期の下見になる。相当な負担が学校現場に押し寄せると問題点が挙げられていました。

安全確保がいまだ確認できず、学校参加はふさわしくない 問題が起こったときに学校長だけの責任にすることのないように

万博会場について、大前提の安全確保でいまだ不明な点が多い。メタンガス対策で換気設備や検知器つけるというが、今もメタンガスは発生時続けている。このような場所への学校見学はふさわしくない。学校ごとの判断を尊重するとともに、問題が起こったときに、学校長だけの責任にすることのないように。とも指摘されていました。

チケットの学校取得までは、キャンセル可能ともされています。本当に学校行事にふさわしいか、慎重な検討と判断が学校に求められています。

おおさか高校教育シンポジウム「どうなる？入試改革」
１月１８日(土) １３：３０たかつガーデン３階カトレア

大教組新春学習会「大丈夫なのか？万博遠足」
１月６日（月）１３：３０　たかつガーデン８階たかつ西

詳しくは組合 HP

府教育庁「令和8年度からの特別支援学級編成」

府教育庁から、令和8年度からの支援学級編成についての方針が示されています。

従来、「障害種別ごと」に全学年合わせた人数を上限の8人を基準に分割して編成していましたが、令和8年からは、「障害種別ごとに、同学年の児童生徒で編成することを原則」し「できる限り少ない学年で編成する」としています。

また、複数学年で支援学級を編成する場合は、2以上の学年が8人以下の場合で、8人を超える学年は複数学年で編成しないとしています。

例１　児童生徒数合計÷8 人とは考えない

障がい種別ごとに同学年の児童生徒で編成、を原則に。
できるだけ少ない学年で編成。

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
児童生徒数	3人	2人	2人	4人	3人	2人	16人
従来の編制	16人÷8＝2学級						2学級
新たな編制	①			②		③	3学級

例 ２　8人超える学年は複式学級の対象外

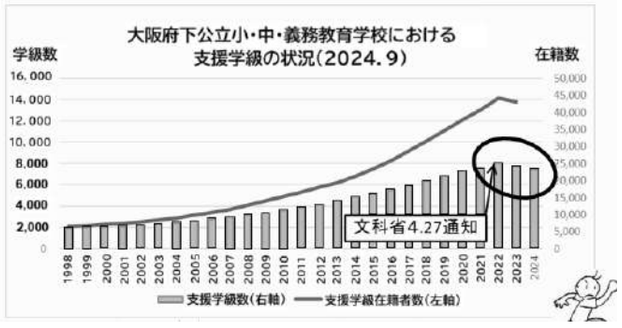
・基準人数を下回る、下位の学年から順に編成
・必ずしも、引き続く学年の児童生徒によることを要しない。

学年	1年	2年		3年		合計
児童生徒数	3人	9人		4人		16人
従来の編制	①	②				2学級
新たな編制	①	②	③	①		3学級

例 3　複式学級編成は、2以上の学年の児童生徒数が8以下の場合のみ

児童生徒数が基準を下回っている場合であっても、複式学級編成ができないことがある。

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
児童生徒数	5人	5人	5人	5人	5人	5人	30人
従来の編制	①	① ②	②	② ③	③ ④	④	4学級
新たな編制	①	②	③	④	⑤	⑥	6学級



今回の提案は、この間の大阪府下での特別支援学級の激減に対して、府教育庁が、特別支援学級の増設置を見込んでいると思われるものです。

右のグラフのように、府下では文科省基準による対応が強められることで、大幅に支援学級、在籍数が減少しています。

枚方市は全体として、府の傾向と違い、学級、在籍数とも増加していますが、以前の動向からはおさえられていると思われます。

今回の方針はかつて文科省も同じ考えを示し、大教組の障教部も、同じ方法を求めてきています。市教委としても、これに基づいた対応をしていくように、求めていくことが重要になります。

外国で大きな反響　映画「小学校～それは小さな社会」

日本の先生には、ありふれた普通の日常
フィンランや、外国で大きな反響、日本の小学校教育に注目が

ナレーションも、説明テロップもないドキュメンタリー、しかも普通の公立小学校の1年間の子どもや先生を映した映像。日本の先生には当たり前すぎるこの作品が、教育先進国といわれるフィンランドや外国で大きな反響を呼び異例のロングランに。

子どもたちが給食や掃除、日直、行事など学校生活の中で役割を与えられ、みんなで意見を出し合ったりしながら、どのようにコミュニティーの一員として考えて行動していくか。

日本で当たり前の学校の日常の中で、欧米諸国からすれば考えられない子どもたちの言動、生活が繰り広げられる。

OECD なども高く評価する日本の学校の特性を、自身も小学校を　日本で過ごし、その後アメリカでの生活や仕事を経て、日本の在り方を見つめなおそうとする山崎エマ監督の作品ならではの視点が生かされています。

等身大のリアルな日本の教育に光、反面の「危うさ」もとりあげる

山崎監督は、「欧米は、まず初めに他と違う個性を育てる教育、日本はコミュニティーでのつながりや役割を身に着けようとする教育」として、その小学校教育が、外国人も驚くような日本の安定した社会生活(安全や仕事の正確性、協調性)につながっていると指摘。

日本では自分たちの学校教育を卑下する傾向が強いが、世界から注目される小学校教育に光を当てて見直すべきとしています。

一方で、「すごいですねニッポン」のような取り上げ方ではなく、集団性を強く求めるあまり、同調圧力によるいじめやかつての軍国主義教育に利用された危険性も取り上げています。

迷いながらも子どもに寄り添う先生や、個人の生活を犠牲にしながら、子どもに厳しさを求める「ザ・教師」のような先生にもスポットを当てています。

急速に変えられていく学校教育の中で、
何を大切にしてどんな方向めざすのかを考えるきっかけに

映画で取り上げるのは主に日本では「特活、行事、クラスづくり」と呼ばれるような学校の取り組み。欧米には見られない学校教育の分野で、エジプト、インドネシア、シンガポールなど導入国も広がり始めています。

学習指導要領には基本的な内容は挙げられているものの、教科書はなく、ほぼ戦後の学校の中で現場の先生たちが、子どもたちにより良い学校生活、人間的成長を促すためにどうすればいいのか、意見を出し合い、互いに学びあいながら受け継ぎ、作り上げてきた活動です。

山崎監督も日本の学校では、「集団を強調する問題」はあっても、今の先生たちは以前よりはるかに個人を大切にして、授業を止めてでも困っている子に対応しようとしていると、先生たちの努力を取り上げています。

しかし、今の指導要領で、過重すぎる学習内容、高度な教育課題で、急速に多忙化、教員負担がかかり、行事や学級での取り組みが急速に縮小されています。

今一度、日本の小学校教育の特性に光を当て、学校教育を変えることで日本社会がどのようになってしまうのかを考えていくことが必要と強調されていました。